EGG
スパイの恋人
鞍馬 榊音 著

目次

はじまり 1
シルバー・フォックス 4
危険で簡単なミッション 8
再開 11
オークション 16
襲撃 19
暗殺のターゲット 24
ばいばい 27
オメルタ 32
メロス作戦 36
証言 38
男が背負うもの 41
スパイの恋人 46

はじまり

　塀の上に、一人座っていた。
『あなたの名前は、何ですか？』
尋ねると、それは答えた。
『広く、ハンプティ・ダンプティと呼ばれているよ』
と。
『広く？』
そう疑問符を投げかけると、ハンプティ・ダンプティは言った。
『僕が、誰であろうと君は構わないし、関係のない話だね』
　次に、ハンプティ・ダンプティにこう聞いた。
『何故、塀の上に座っているのですか？ 危ないですよ』
ハンプティ・ダンプティは答えた。
『僕は、塀の上が好きなんだ。危ないかどうかは、君個人の見解だろう』
と。何も言えないでいると、ハンプティ・ダンプティは続けた。
『君は、塀の上に座っている僕に興味を抱いた。それは、僕が君にとって、きっと君達と違う奇怪な行動を取っている様に見えるからだろう。例えば僕が塀から降り、君の後ろを歩いていたのだとしたら、君は僕になんの興味も示さなかっただろうね』
実に面白い主張だと思い、ハンプティ・ダンプティに質問した。
『あなたは、私達と同じだと言いたいのですか？』
ハンプティ・ダンプティは答える。
『相違はないよ』
やはり滑稽な返答だと思った。
『あなたは、何者なのですか？』
問う。
『さっきも言ったけど、僕が何者であろうと君は構わないし、関係のない話だろう。君は僕が何者なのか知って、どうするつもりなんだい？』
と、ハンプティ・ダンプティ。
返事に困っていると、ハンプティ・ダンプティは、一人続けた。
『僕は君に対して、何も関心がなかった。何故なら、君も他の人達と同様に、僕の足元を僕に気付かず通り過ぎて行くだけだと思っていたから。だが、さっきから君はなんだい？ 僕に対して質問ばかりするじゃないか。僕に気付いただけでは飽き足らず、疑問ばかりだ。たまには、今日の天気についてだとか、今朝焼いたクッキーの出来がどうだったとか、そんなつまらない話をしてみたらどうなんだい？』

ハンプティ・ダンプティ、本当は饒舌なのかも知れない。
『今朝、クッキーは焼いていないけれど、あなたが饒舌なのはよくわかりました。そして、傲慢だという事実もね』
ハンプティ・ダンプティが、悲しそうな顔をした。
『君は、もう僕が塀の上に居る理由を知ったじゃないか』
最後まで、ハンプティ・ダンプティは傲然たる態度を崩さない。

　塀の下に、一人座っていた。
『あなたの名前は、何ですか？』
尋ねると、それは答えた。
『広く、ハンプティ・ダンプティと呼ばれているよ』
と。
『広く？』
そう疑問符を投げかけると、ハンプティ・ダンプティは言った。
『君は、もう僕が何者なのか知ったじゃないか』
ハンプティ・ダンプティは、続けた。
『君は、僕が塀の上に座っている時だけじゃなく、僕が塀の下で座っている時にまで、疑問ばかりだ。しかも同じ質問ばかりする。たまには、明日の天気についてだとか、明日焼くケーキの種類についてだとか、そんなつまらない話をしてみたらどうなんだい？』
ハンプティ・ダンプティも変化のない主張ばかりする。
『やはり、あなたは私達と相違ないのですね』
ハンプティ・ダンプティは、哂った。
『僕が君達と相違ないかどうかは、君個人の見解だろう？』
ハンプティ・ダンプティは、相変わらず傲慢だ。
『あなたが塀の上に座っている時、あなた自身が私達とあなたは相違ないと言ったんですよ』
抗議すると、ハンプティ・ダンプティは、こう返した。
『それは、ハンプティ・ダンプティ個人の見解だ。じゃあ、君は何故僕が塀の下で座っていると思うんだい？』
返事に困っていると、ハンプティ・ダンプティは、構わず続けた。
『ハンプティ・ダンプティが、ハンプティ・ダンプティであるのは、塀の上にいたからなんだ。僕は塀の下に来て、ようやくその事に気が付いたんだ。だから僕の言う相違ないと、君が言う相違ないは、相違あると言う事なんだよ。だから、質問の答えはね、僕がハンプティ・ダンプティでなくなったという事実に繋がるんだ』
ハンプティ・ダンプティの傷を指差す。
『あなたは先程、あなた自身のことを、広く、ハンプティ・ダンプティと呼ばれているよ、と答えたじゃありませんか？』
ハンプティ・ダンプティが、困った顔をした。
『ハンプティ・ダンプティという固有名詞が僕を指すと言うのも、真実の一つだからね。ハンプティ・ダンプティがハンプティ・ダンプティで無くなった時の固有名詞を、僕は

まだ知らないんだ』
　展開は、ハンプティ・ダンプティが塀の上にいようとも、塀の下にいようとも変わらないなと思った。

ただ一つ変化があるのだとしたら、ハンプティ・ダンプティは壊れてしまったんだという真相だけ。
ハンプティ・ダンプティは塀の下に居たのではなく、塀の上から落っこちてしまったのだ。
ハンプティ・ダンプティは、塀の上から落っこちて、壊れて初めて、明日の事を気にするようになったのだ。
ハンプティ・ダンプティは、塀の上から落っこちて、壊れて初めて、ハンプティ・ダンプティはハンプティ・ダンプティだけの世界だったと気が付いたようだ。

シルバー・フォックス

パープルアイと名乗る人物から、入社希望があったとのこと。
そのパープルアイなる人物の入社試験の為、俺、正しくは俺達二人は今まさにN空港の某カフェにて、珈琲を飲みながら時間潰しの最中だった。
この店の看板である男か女かわからない人形の顔が緑の円の中で、にんまり笑いながらお客を見下ろしている。
「そろそろ現れるんじゃないかな？ 飛行機は、予定通り到着しているみたいだから」
俺の若干斜め前に腰掛けた男、永塚要（ ながつかかなめ ）が、キャラメルフレーバー珈琲を飲みながら呑気に言った。パープルアイとは、このカフェで待ち合わせらしい。
「稲葉（ いなば ）、君はパープルアイについて知ってる？」
永塚は、つまらなさそうに、そう問うた。
「さあ？」
大して知り得ない。俺の貧困な情報量では、答えるにも面倒な質問だった。
「今から十数年前、露国の小さな村で、虐殺があったんだ。奇跡的に生き残ったのは、子供一人だけ。強盗目的の殺人だったようだけど、あまりにも困窮な現状に、被害が大きくなったんだと言われているよ。その生き残った子供が証言したのが、村を襲ったのは紫の眼を持つ男だった。というもの。パープルアイと呼ばれる由来だ。けれど、その証言すら今は危うくも遠い昔話だし、その子供も、保護されて直ぐ行方不明になったそうだよ」
暇潰しついでに、尋ねてもいない永塚のパープルアイ談に、耳を傾けた。そして、返事代わりに一言呟く。
「殺人鬼ってやつか」
「そう、殺人鬼ってやつだね」
殺人鬼様が、就職活動とは。世の中どれだけ不景気なんだ。
その、パープルアイなる殺人鬼を社員に迎えようとする、クレイジーな会社の諜報部に配属しているのが俺達である。
今回、会社からはこのパープルアイの入社試験を指示されている。諜報部と言えど、会社の裏側で働く人材が少ないので、諜報活動以外の仕事もさせられるのが現実だ。

ハンプティ・ドロ。が、会社名だ。卵に手と足を生やしたシュールな金ピカ男が、シルクハットを被り、ステッキを片手にスキップするマスコットキャラクターを売りにしている。ハンプティとは、ハンプティ・ダンプティからの拝借であり、文字通り卵男と謎掛けを意味する。そして、ドロはイタリア語で金の意味を持つ。直訳すると、金の卵男だ。

金というだけあって、この会社は金に関する商売を生業としている。ここで言う金とは、ゴールドではなくマネーの方である。自社で開発した、株、為替のトレーディング解析ソフトの販売、株、為替のレート情報や手数料等のサービスキャンペーンに関するメールマガジン配信サービス、検索エンジン、広告サイトの運営、有価証券の売買、投資ファンド。ざっと挙げると、こんなところである。

俺が珈琲を飲み終えたタイミングで、スーツケースを手にした小柄な女が、俺達の前に現れた。クラッシュデニムに、鎖骨の大きく見えるルーズシャツ、赤毛のパーマ掛かった髪を後ろでアップに纏めている。顔に似合わない大きなサングラスを少しだけずらしながら、女は赤いグロスを塗った唇を開いた。
「貴方達、ハンプティの方？」
永塚が「ええ」っと頷くと、女は自己紹介を始めた。
「通称パープルアイ。シルバー・フォックスと申します」
永塚と俺は、視線を合わせた。噂上、パープルアイは男ではなかったか。
「ハンプティ・ドロ。永塚要です。こっちは、稲葉剣悟（ いなばけんご ）」
フォックスと握手をした。指に残る幾つかの硬い跡から、この女が曲がりなりにもパープルアイである可能性は否定出来なさそうだ。
Ｎ空港から、車で一時間弱。
「来て早々悪いが、あんたの入社試験だよ」
とある高級マンションの前で停車した。
「履歴書って必要かしら？」
履歴書が書けるくらいなら、もっと別の仕事を探したらどうなんだと思う。
俺の心情を察したのか、フォックスはつまらなさそうに「冗談よ」と、付け足した。
「稲葉と二人、ターゲットと示談しに行くんだよ」
と、永塚。
俺は車から降りると、トランクから営業鞄と黒いトレンチコートを取り出した。フォックス側のドアを開け、彼女に降りるよう指示を出しながら、トレンチコートを投げ渡した。
「これを着ろ」
フォックスは、車から降りると、大人しくそれに従った。
「ついてこい」
俺は、ぶっきらぼうにそう言うと、高級マンションの中へと入っていった。
オートロックの、部屋番号と呼び出しボタンを押す。
『はい』
案の定、初老男の声がした。
ターゲットと考えて良いだろう。本日有給休暇にて、家族の出払った部屋で一人の時間を堪能中。
趣味は、自宅での映画鑑賞と読書。いつも映画鑑賞には近所のレンタルＤＶＤ屋を利用しているし、読書には同じく近所の図書館を利用している。

午前中は、レンタル屋に行き、帰りに図書館に立ち寄る。 \newline
家族がいない日は、行きつけのラーメン屋で昼食を済ませてからの帰宅。そして、ターゲッ

全て調査済みだ。 \newline

「こんにちは、お忙しいところ失礼します。私、Y保険会社の坂田（さかた）です。新山（にいやま）様が加入している生命保険の事で、ご提案がありまして、近くを通りかかったので寄らせて頂きました」
何の疑いもなく、オートロックは開けられる。ターゲットの部屋の前に着くと、フォックスに呼び出しボタンを押させた。チャイムが鳴ってから、その余韻が消えない間に、扉は開かれる。扉を開けた初老男は俺の顔を見、驚きのあまり目を見開いたまま開けた扉を閉めようとして止めた。俺の突き出した拳銃に気付き、俺達が部屋の中に入ることを受け入れたのだ。
やはりターゲットであった初老男は、両手を挙げながら俺の突き付けた拳銃の先を見つめ、後退りながらリビングへと入っていった。
「殺すのか？」
と、震える唇で声を出し、ソファの端に足を引っかけ、派手に転んだ。
「否、死んで貰うんだ」
俺が言い終わるのが早いか、新山の額から血が吹き出し、奴は白目を剥きながらひっくり返った。
「これで、いいかしら？」
俺は返事の代わりに、口笛を吹いた。
フォックスは、サイレンサーの取り付けられた銃を手慣れた手つきでバッグの中へと片付けた。
「永塚、入社試験は終わりだ」
車に戻ると、俺は永塚に告げた。
「それで」
「合格」
永塚が会社に連絡を取ると、会社から今度はフォックスを再びN空港へ送れと指示があった。フォックスにもなにやら会社からの指示が来たようで、彼女は面倒そうな顔でスマホを確認していた。
「ところでさ、さっきの仏さん。どーなるの？」
N空港に着く少し前に、フォックスが聞いてきた。それに、永塚が答えた。
「会社が掃除に来るんだよ」
「ふうん」
自分から聞いといて、興味なさそうに返事をするな。

　翌日、俺達はニューオーリンズに移動するよう指示が来た。そこで次の指示を待てとの事だった。

危険で簡単なミッション

他の土地より少しくらい治安が悪い程度のニューオーリンズの風は、世間様から少々はみ出した程度の俺にとって、大層心地の良い場所だ。
それはそれは、気持ちの良い朝の事。
否、ちょっと大袈裟過ぎる表現ではあるな。訂正すると “それは、普段と大して変わらない天気だけは気持ちの良い朝のことだ”。
一応、相棒の永塚要が、お気に入りのくまプーのエプロンで、俺を起こしに来た。
午前六時。
そんな爽やかなのかクソメイワクな早朝も、奴の『いつまで寝てんだよ!!』等と言う無神経な一言で、更に不愉快になる。
爽やかな朝だから早起きしろ、と言う永塚に『したきゃ一人で起きてろ!!』と言ってやりたかったのだが、なんとなく面倒臭いに加えていつもの事なので、やめた。
……言っても、どうせ無駄なだけだしな……。
爽やかな朝はゆっくり起きて、ビールでも飲みながら、ついでにタバコでも吹かしながらゆっくりのんびり過ごしたいと言う俺の定義は、奴にはこれっぽっちも伝わらないようだ。
では何故こんな性格も考え方も真逆な奴と組んでるかって？
それにはもちろんちゃんとした理由があっての事。
永塚は世話好きなのか、炊事やら洗濯やら掃除やらと言った家事全般が大好きなのだ。
以前『趣味か？』と聞いたら『趣味なわけないじゃん、いなっちがやんないからでしょ？』とか言われたが、あれは趣味に間違いない。
ちなみに、いなっちとは永塚が勝手につけたあだ名で俺のである。
そう言う事情だ。
そうでなければ、一緒にいる理由はない。
寝ぼけ眼でキッチンに着くと、テーブルにはいつもの様に朝食が用意されていた。
香ばしく鼻腔をくすぐるバターの臭い。狐色に焼かれたトーストとベーコンエッグ、それからサラダにミルク。
先にトーストを片手に大口をあけた永塚が、俺に気づいて再び「おはよう」と言った。俺はそれを無視して、無言のまま冷蔵庫の扉を開けた。取り出したるは缶ビール。俺の朝は、コイツから始まる。
薄い布地のカーテンが揺れる。こげ茶色の窓枠に仕切られた小さな四角形から溢れ出す酷く滑稽な日の光が、俺をあざ笑っているようにも思える。ビールを開けながら暫く静止するかの様に、本来なら清々しく気持ちよくもある筈の青空を睨み付けた。鳥がピーチクパーチクいいながら、四角い空を横切っていった。

気持ちいいなんて、思いたくても思えない。
ただ、もし空を見上げて良かったと思える事があるのだとしたら、それは夜空の月が赤く染まっていなかった時。
「朝食冷めるよ」
「ああ」
なんて不器用に返答して、椅子に腰掛けた。
永塚が面倒臭そうに、カフェ・オ・レを啜った。俺も続いてビールを飲み干した。
「ようやく、会社から指示が来たよ」
「ああ、あまりにも遅いんで忘れてた」
シルバー・フォックスとか言う愛想のない女の入社試験以来、ニューオーリンズに行けと言われてから音沙汰がなかった。
「なにを？」
「働いてること」
永塚が笑った。
「間違いないや」
「で、なんて？」
「先日、会社で開発した最新型コンピューターウィルス G-Z が盗まれたんだって。G-Z 奪還とそれについて知ってしまった犯人および関係者の暗殺だってさ」
「暗殺……とは穏やかじゃないな」
永塚が、鼻で笑った。
「今更？ で、笑えるのがさ、シルバー・フォックスを助っ人に用意したんだって。五時間くらい前に」
「は？」
「凱旋門の下で三日後の正午、赤い薔薇を一輪手にした赤毛の女性がそうだ。そして、一週間後の午後八時、パリのオークションにて何者かによってが G-Z 出品されるという情報が入ってきた。その前に確実に奪還して貰いたい。他人の手に渡ったとあっては、後々厄介なことになる。決して口外してはいけない、極秘データなのだよ。以上でミッション内容は終了する。尚、これは当社からの警告として、G-Z の内容について必要以上に嗅ぎ回らない事だ。それから、どちらか又は両方が拉致された場合や殺害されたとしても、当社としては一切の責任を負わないのであしからず。君達の幸運を祈っているよ」
「赤い薔薇なんか無くても分かるだろうよ」
「どんなコンピューターウィルスなんだろうね？ というか、オレたちってこんな危険な任務請け負うような立場だったっけ？」
「一応な」

ハードボイルドに反してあるソフトボイルドなんて言葉は、俺みたいな中途半端な人間の為に出来た言葉なんだろうと俺は思う。
最近、そう……銃を手にした時、俺の死に場所は何処なんだろうかと思うことがある。
無機質なまでに冷たい愛銃マグナムの手触りと硝煙の臭いが、俺の恐怖心と孤独感を煽り、その日暮らしの命がけのゲームが、お前にはピッタリだよと誰かが語りかける。命

がけのゲームの代償が生きる意味だと言うなら、それだけで俺にとって充分価値ある。

朝食を食べ終え一服すると、早々パリに飛ぶ準備を始めた。
移動には、民間旅客機を使う。
武器は全て会社から普及された特別製トランクに仕舞い込む。Ｘ線に通しても中身が映らないどころか、まったく別の物が入っているかのように見えるもので、更には金属探知機にまで反応しない。
機内に持ち込むハンドバックも同じだ。中に銃と予備の銃弾を多少仕込むが、それに気付かれ止められたことは今の所ない。なかなかの代物だ。

再開

なんとなく冷えた印象を受ける、この時期のパリの街並み。
パリではなく、もっと田舎の方だが、俺はこの国で育った。
ガキの頃、日本から親の都合でこの国に来たものの、十三歳のとき家を飛び出し、バックストリートで野垂れ死に仕掛かっていたところを運悪く神父に拾われた。
その時、神様は本当にいるかも知れないなんて子供心ながらに思ったものだが、ちょっとした事が原因で神父を殴り倒して、十七歳のときその教会を飛び出した。やはり、神様などいなかったのだと痛感した。
そんな嫌な思い出が詰まったこの国ではあるが、俺はこの国を嫌いだなんて思わない。寧ろ好きだという感情に近いから、この国だけは死に場所に選びたくないと心底思う。
赤や緑、そしてブルーに冴えながらも、華やかな街並みは日の光を浴びて洒落っ気タップリに映る。道端には、しがない画家達が観光客の似顔絵を描いたりパリの街並みを描いたりと、皆前向きに生活している。

そして俺達は今、凱旋門付近のカフェにて待機中。店内から、焼きたてバゲットの臭いが漂ってきた。
「お腹空いたね」
永塚が呑気にそういう。けれども手にはカメラを持ち、観光客気取りで凱旋門の下を観察していた。
「もう少し我慢しろ」
まもなく正午。言付けされた、日時になる。
ふと時計に目をやろうとしたとき、永塚が軽く腰を上げた。
「あ、あの子だ」
「貸してみろ」
永塚からカメラを受け取ると、望遠レンズ越しに覗いた。
――　間違いない、あの女だ。
赤毛と、目立つ赤いスーツにバラの花。あの生意気そうな顔立ちは忘れもしない。
「ちょっと行ってくるよ」
永塚が立ち上がって女の元へ行く所を、タバコに火を点けながら見送った。
五分程して、リックが女と二人戻ってきた。女と目が合う。
「ボンジュール（ こんにちは ）」
彼女は先日の事はなかったかのように、にっこりとそう挨拶した。

「アンシャンテ（ 会えてうれしいよ ）」
と俺も嫌味を込めて返してやった。
こうして改めて見ると、女は思っていた以上に小さかった。〝最強〟の二文字を背負うには、少々重過ぎるのではないかと思うほどに。
「お昼でもいかがかしら？」
さっきからおかしな女だ。俺の目を見据えたまま、全くもって逸らそうとしないのだ。
二度目だと言うのに、まるで初対面なような素振りも気に入らない。
「いいぜ。こっちもそのつもりだったから」
俺もそういいながら、その嫌な目つきを見据えたまま立ち上がった。実に不愉快だ。
「何がいいかな？」
永塚が愛想たっぷりで女にそう言った。永塚の方は、気にもしていない様子なのだが。
「そうね、カフェで焼きたてのバゲットも捨てがたいけれど、折角フランスに来たのだから、フランス料理を頂きたいわ」
「オッケー」
嫌な女だと思った。哀れむような感情を込めた目で俺を見てやがった。時折諦めた様に見せる笑顔の影に、黒くヴェールのかかった何かが見える。この女も俺と同様、糞みたいな道を歩んできたのかもしれない。
「ところでさ、貴方達名前は？」
店を探しながら歩いている途中、女が言った。何を言ってる？ なら
「人に名前を尋ねるなら、まず自分から名乗るのが礼儀だと教わらなかったのか？」
女が鼻で笑いながら、またあの目で俺を見上げた。
「失礼！ 生憎そんな育ちの良いお嬢様ではないの。それに、私と違って貴方達はもう既に全てを把握しているんじゃないのかと思って。気が利かなかったわね。私の名前は、シルバー・フォックス。シルバーでもフォックスでも、好きに呼んで」
「どういう意味だ？」
女が更に睨み付けてきた。
「貴方、さっきから初対面の女性に向かって失礼なんじゃない。仮にもこれから仲間になるって言うのに、少しは紳士らしくしてちょうだいな！ 第一、話をするにもここじゃ目立ちすぎる」
「……」
俺と女の睨み合いが続いた。
「まあまあ、二人とも良さそうなレストランに着いたよ。中でゆっくり食事でもしながら、話し合おうよ」
割って入ってきた永塚を横目に、俺と女の睨み合いは終わる。そして、永塚を先頭にレストランへ。
レストランの店員には、仕事の大切な話し合いがあるといい、奥の目立たない席を用意させた。
入って直ぐに俺達を出迎えたのは、小ぶりのシャンデリア。ギラギラと眩しくて、とてもじゃないけど俺達三人には不釣合いの品だ。
席に着いたとき並べられたナイフとフォークのセットも彫刻なんかが施されていて、と

てもとてもお上品。早速手に取ると、クルクル回しながら弄んでみた。
「なあ、永塚よ。このナイフ、本当に切れると思うか？」
「切れなかったら置いてないだろ？」
止めろと言わんばかりの目で、永塚は俺を見た。女は知らん顔して座っている。
「そう、じゃあ」
俺は、ナイフを投げた。
ナイフは綺麗に飛行して、ウェイトレスの鼻先を紙一重で通り過ぎると、綺麗に柱へと突き刺さった。
「きゃあ!!」
ウェイトレスの悲鳴が上がると、同時に彼女の運んでいた料理が辺り一面にぶちまけられた。
「うん、よく切れるナイフだ」
同席にはそれを見て呆れた様に呆然とする永塚と、顔を逸らしながら肩を震わせて必死で笑いを堪えている女。
ナイフがないと一応は困るなと思い、俺はウェイトレスを呼びつけた。
「悪いな。手が滑って。新しいナイフを頼むよ、よく切れるやつね」
彼女は涙目で俺を睨みつけ、「かしこまりました」と去っていった。今日はよく睨まれる日だ。
さて、と。一呼吸置いてから、改めて永塚が口を開いた。
「Miss. フォックス、改めて紹介するよ。オレは永塚要だ。そして、そっちの愛想悪いのが稲葉剣悟。先日、君の入社試験として日本で会ってると思うんだけど、人違いかな？」
「そう、ありがとう」
愛想が悪くて悪かったな。
今度は俺が口を開いた。
「ところで、私と違ってとはどういう意味だ？ お前は何も知らされてないのか？」
女がポツンと溜め息を漏らした。
「本当に、愛想が悪い男ね」
俺の眉が、ピクリと動く。
「無愛想で、不器用で、下品で、物臭で……最低な男」
「殺されたいのか、貴様は」
女が、ふっと笑う。
「そうかもね」
「ご希望なら、いつでも殺してやるよ」
「血なまぐさい人」
それ以上この女と話したくもなくなって、俺は黙りこくったままタバコを咥えた。火を点けて、灰皿の代わりに置いてあった真っ白い皿に灰を落とした。
「連れが失礼したね、Miss. フォックス」
「貴方なら、まともに会話が出来そうね」
永塚に紫煙を吹きかけた。
「ところで、僕らは君と組んであるミッションを行うよう言付けされたんだ。君はまた違

うようだね。だから詳しい内容はまだ言えないけど、君が可能であるなら、君の受けたミッションを教えてもらいたい」
突如、女は立ち上がると、俺に拳銃を向けた。
「何のつもりだ？」
永塚が急いで、自分も拳銃を抜こうとした。
「待て永塚」
「いなばっち！」
再び、女に向き直る。
「何のつもりだって聞いてんだよ？ クソ女」
女から、さっきまでの気丈さが消えた。
「……私は……私が覚えているのは……自分の名前、〝シルバー・フォックス〟と、〝今日の正午、凱旋門の下で赤い薔薇を一輪手に、二人の男を待つ〟ということ。それと、自分が〝スパイ〟だって事だけ……」
女の握る拳銃がカチャカチャと音を立てながら、微妙な標準で俺の頭部に狙いを定める。
「どうした？ 撃てよ？」
「……」
「引き金が引けねえなら、拳銃なんて持つんじゃねえよ」
「……して……」
「あ？」
女が諦めたように拳銃を下ろして、うな垂れた。
「お願い……私の記憶を探して。唯一残された記憶の中の言葉〝二人の男〟である貴方達しか、手がかりがないのよ……大切な事が、忘れちゃいけないことがあった気がするの」
面倒くさいこと、この上なしだな。
しかし、だ。ニヤリと笑う。
「ほう。男二人、しかも初対面相手にオネダリとは怖いもの知らずなお嬢さんだこと」
「ちょっと、いなばっち!!」
俺は永塚を無視して立ち上がった。
「さあて、お嬢さんはどんな報酬を支払ってくれるんだか」
女の顎を指先で引き上げた。身長差に少し苦しそうにしながらも、必死で睨みつける女の目を凝視した。
「ゲス野郎!!」
――貴様が、気に食わねえんだよ。
「そうだな。〝最強〟の二文字が報酬ってのはどうだ？」
「!?」
「もちろん、全てが済んだ後だ。お前を始末するなとは言われてないんでね」
女の瞼が、笑うように閉じて開いた。
次に双眸へと浮かび上がった感情は、一言で表現すれば『面白い』。
俺を、馬鹿にしてるのか。気に食わない!!
「女なら、泣け！ 謝れ!! 女らしく縋れば、俺だって少しぐらいは考えてやる」
「いいわ。その代わり、私に抵抗する権利はあるのかしら？ ないのかしら？ 無抵抗な女

を殺すのが、貴方の殺り方？」
「抵抗したいならしろ」
そして、再び腰を下ろす俺。同時に料理が運ばれ、テーブルに並べられる。
「私が受けたミッション。そんなもの分からない。敢えて言うなら、貴方達に会うことかしら。過去の記憶もひっくるめて、今の私には名前以外何もないの。目覚めたのは飛行機の中。パリに着く一時間程前だった。元々存在しなかったかのように、全ての記憶がすっぽりとなくなっていた」
今度は永塚が口を開いた。
「君と一緒に、新型コンピューターウィルス〝G-Z〟の奪還及び、関係者と情報を知り得たものの抹殺。これが、オレ達二人が受けたミッションだ」
会社は、何の為にこの女の記憶を消したんだろう？
そして、何故今回に限って三人なんだろうか？
どちらにしろ、面倒臭い。そして、気に入らないミッションだと心底思う。
食事を済ませ、女が化粧室へと席を立ったとき、永塚が話しかけてきた。
「いなばっちにしては、めずらしいね」
「何が？」
「面倒臭いって言うと思った」
「お前ならどうした？」
聞かれて奴は一呼吸置いてから、想像通りの台詞を吐いた。
「最強には興味ないけど、取り敢えずはイエスかな。仕事だもの」
そう、重要なのあの女と組めというミッションなのだ。
「俺だって最強の名前なんて興味ないさ。ただ、今回の状況……おかしすぎないか？」
「何か……あるよね。絶対。なんか嫌な予感しかしない」
女が戻ってきた。
「これから、どうすればいいのかしら？」
永塚が答える。
「取り敢えず、ホテルを取ってあるから、そこに移動しよう」
「分かったわ」

永塚同様に嫌な予感がする。仕事自体は容易ないだろう、だが何か引っかかる。
そう簡単に事は運んでくれなさそうだ。

オークション

やはり、事は簡単に運んでくれなかった。
ホテルにて、早速永塚がパソコンを立ち上げ、まずはG-Zかけられる筈のオークションの情報を探ってみる。しかし、情報が何一つ見つからない。
「どうなってるんだ？」
永塚がぼやく。
「どうしたんだ？」
俺が気だるそうに尋ねると、永塚はそれを無視するかのように画面を凝視したままタバコを一本取り出した。咥えもせず火を点けもせずに、指先で暫く弄んでいた。
今度は俺が一本タバコを取り出した。咥え、火を点け、紫煙を吹き出した時、永塚は重々しく口を開いた。
「情報がないんだ。何一つ」
「？」
「オークション情報から、関係者や登録者の情報を探り出して、持ち主を特定させようと思ってた。けど、パリで開かれるオークションなんてないんだ。それらしいイベントの情報や、会場の情報すらない。このままだとつまりは……」
「オークションなんて開かれないって事？」
俺の代わりに女が応えた。
「そういうことだね」
永塚がパソコンを閉じた。
「いなばっち、どういうことだと思う？」
「さあ？ パリ観光でもしろって事なんじゃね？」
ゴロンとソファーへと仰向けに寝っ転がった。
「そんな適当な」
「なあ、永塚。例えもしオークション情報が出任せだったとしたら、G-Zはどこへ？ G-Z自体、本当に存在するのか？」
永塚は苦い表情をした。
「それがさ、オレも気になって会社のコンピューター関係のプロジェクトチームのデータに入ってみたわけ。G-Zなんてどこにもないんだ」
「？」
「まあ、G-Zがコードネームであって、本当の名称ではない確率の方が高いけど……」
チラリと女に目配せさせる。
「おい、女」

女が睨む。
「名前で呼んでくれないのね」
「お前、本当に何もわからないのか？ 何か持ってたモノとかないのか？」
「私を疑ってるの」
女が立ち上がる。
「飲み物、買ってくる」
そういい残して、部屋を出て行った。
「いなばっち、そりゃオレだって少しは怪しいって思ってるよ。だけどさ……」
「永塚、お前はとことん女に甘いな」
「甘いとか甘くないじゃなくて……」
突然、部屋の扉が開いた。
出て行ったはずの女が入ってきた。
「なんだ？」
「財布取りに来ただけ」
そして再び部屋を出る。
「あ、私。別にアンタ達騙す必要性なんてないから」

パタン！

永塚の、大きな溜め息が一つ。
「……取り合えず、もう少し調べてみるし。ギリギリになれば、何らかの情報が浮上してくるかも」
俺も、溜め息とは違う息を吐いた。

**** *

しかし、オークション当日になっても何一つとして情報が浮上してこなかった。
流石におかしいと思い、前日から会社に連絡を取るものの、一向に繋がらない。益々怪しい。
何度目かも分からない電話を切りながら、俺はパソコンをひたすら叩き続ける永塚に切り出した。
「ずっと思ってんだけど、俺達嵌められたんじゃないのか？」
永塚は渋い顔をしながら、パソコン画面より顔を上げた。続いて無言のまま側の灰皿から吸殻の品定めをすると、そのシケモクの先から灰を落とす。それを咥えて火を点けた。
「タバコくらい買ってきてくれてもいいじゃん。シケモクって不味いんだよね。なんかこう苦味とニコチン臭さが強調されちゃってさ。こんな室内に何日も篭ってるから苛々するんだよ。思い切ってパリ観光でもしようか」
突如、先程までとは打って変わって物凄いマシンガントークで切り返す。
「そうそう。いなばっちはどこ行きたい？ オレはさ、凱旋門は見たからエッフェル塔とか見たいかな。後ね、焼きたてのバゲットでも食べながらカフェでお茶なんてのも最高

に良いと思わない？」

段々、俺の方が苛々してきた。

「あー!! うっせえ！ うっせえ!! お前なんか一人で、エッフェル塔の天辺でパン喰って寝てろよ!!」
そんな俺を無視して、貰い！ っと永塚が俺のタバコを一本盗んでいった。
その脇では帰ってきたばかりの女が、そ知らぬ顔をしてビール片手にタバコを吹かす。
仕方なく、どかっとソファに腰を下ろした。
「なあ、パリになんかあるんか?」
夕日よろしくオレンジ色に燃えるタバコの先を見つめながら、少し長くなった灰をとんとんと灰皿に落として、永塚は答えた。
「パリで、オークションなんて行われない」
女のタバコを吸う手が止まる。
暫くの間をおいて、女のタバコから灰が折れるようにして落ちたとき、永塚は続けた。
「花の都で行われるのは、殺人だ」

……は？

「誰の？」
俺が言う。
「暗殺。それも時には任務だと言ったのは貴方達。何を今更？」
女が言う。
最後に永塚が言った。
「オレ達とは別に、暗殺チームが動いた。詳しいことはわからない。だけど、どっかの誰かが何らかの目的で殺されるのは間違いない」
パリには俺たちが居る。だけども別に暗殺チームが動いたとも言う。G-Z とも関係があるのだろうか？
益々嫌な予感がしてならない。
G-Z、とんでもない疫病神だとみた。

襲撃

コツコツコツ……。

床を打つ足音が響く。己の固い靴の音。耳障りなぐらい、広く静かな冷え切った空間に響き渡る。
聖母マリアの絵柄を模ったステンドグラスの窓は、太陽の光を七色の光の筋に変え、無機質な石の床にその影を落としている。
〝光は神の愛〟等と、昔の人はよく言ったものだ。
寂びたオルガン、それから十字架に吊るし上げられたキリスト像は無表情に。

散歩がてらぶらぶらと歩いていたら見つけた、公園の脇に建てられた小さな教会。特に何があった訳ではないが、なんとなく入ってみた。
皮肉にも、懐かしい等と感じるのは単なる刷り込みか。
この教会ではないが、教会に暫く住んでいた時期がある。住んでいたというより、行く場所がなかっただけなのだが。その教会はもっと貧乏だった。オルガンは壊れて音の出ない鍵盤キーもあったし、ステンドグラスには聖母マリアなんて描かれていなかった。それでも一応なりに申し訳なさ程度に埋め込まれたステンドグラスの小窓は割れてテープで補強されていたうえ、日当たりが悪く日の光が差し込むこともなかったから年中蝋燭の光を絶やさぬようにしていた。
教会には俺みたいな行き先のないガキが何人かいて、毎日腐りかけた木の椅子に腰掛けさせられては、神の愛がどうだとか慈悲がどうだとかウンチク聞かされたものだ。そんな時、決まって俺はイビキ付きで居眠りをしてやった。
「神の慈悲を必要となさりますか？」
神父らしき年寄りが、突如話かけてきた。神なんていない。居る筈ない。
「俺は多分仏教だ。見てわからんかな」
「神は、全てを愛しています。貴方に信じる心があれば、神は誰でもお救いくださいます」
神父はゆっくりと微笑みながら言った。
「仏教でも？」
神父は言う。
「貴方が、本当に神の救いを必要となされば」
そうかね。
ふいっと顔を背けた。
「生憎だが、俺は神サンなんか信じちゃいないんでね。ついでに、仏サンも信じちゃいないけど」

立ち尽くす神父を無視して、キリスト像の前で踵を返した。
再び俺の足音が小さな教会内を響かすと、続いて足音が重なった。どうやら神父も諦めたようで、何処かへ行ってしまったよう。
教会を出ようとしたとき教会に並べられた長椅子の、一番後ろの席に座っていた女に呼び止められた。
「お祈りは終わったの？」
誰だと思って目を向けると、あの女だった。
「ナムアミダブツ、ナムアミダブツ」
両手を合わせ、まるで赤ん坊の喜ぶ玩具の様にぺこぺこと頭を下げる。
「何も覚えてないんじゃないのか？」
「ろくでもない事は覚えてる」
「ご都合のいい記憶喪失だこと」
立ち去ろうとしたら、腕を捕まれた。
「待ってよ。私ね、貴方のこと無愛想だとは思うけど、嫌いじゃないのよ」
相変わらず、単刀直入に失敬な事を言う女。
「無愛想で悪かったな。俺はお前を殺す男だ。嫌いになれよ」
よっこらしょと、女は椅子から立ち上がった。身体についた埃を落とすように、ぽんぽんとスーツの皺を伸ばす。
「ろくすっぽ知りもしない人間を、嫌いになる理由なんかないわ」
なるほど、と思いつつ、なんだかこの女のペースに飲まれているような気がしてならない。
「俺はお前が気に入らないけどな」
「だから名前で呼んでくれないの？」
特に気に障った風もなく、ただ我が儘な子供を宥めるかのように鼻で笑われた。
そして、品定めするよう俺を見上げた。
「女は裏切るが、上手い酒は裏切らねえとか独り愚痴てそうなタイプよね。なんだっけ？ハードボイルドってやつ？」
馬鹿か。五月蝿い女め。いちいち俺の癇に障る。
「……イマドキそんな奴いるかよ……」
そして、不意に嫌味を思いつく。
「女、なんでそんなに小さい？」
頭をわしわししてやると、女はやっと不愉快そうに顔を歪めて俺から離れた。
更に近付いてやると、女は僅かに後ずさりを始めた。
「な、なにすんのよ」
胸より下の位置に頭がある。今度はぽんぽんと頭を叩きつつ、俺の口元にはニヤリと笑みが一つ。
「牛乳飲んだか？」
「飲んだわよ！ なにさ、ウドの大木め!!」
「うるせえチビだな」
ふいっと背を向ける。

歩き出そうとした俺を、女の声だけが引きとめた。
「アンタなんか大っ嫌い!! 大っ嫌いな筈なのに」
なんだろうか、言われなれてる筈なのに、何故だか妙に〝大っ嫌い〟が気になった。
返す言葉は無いくせに、身体だけは僅かに後ろを振り向いた。
「いっちょ前にサイレンサーなんてつけちゃってさ！ 格好悪いったらありゃしない!! 格好つけるのが男って奴？ 自分で格好良いなんて思い込んでるのなら、益々馬鹿丸出しってやつね」

……殴ったろか、この女（ アマ ）。

「じゃあ、貴様はなんだ。硝煙の臭いをコロンにして、鮮血の赤をドレスに、悲鳴というバックミュージックの上でダンスを踊るイカレたお姫様のつもりか？ そして手に入れたのは〝最強〟というそれはそれは素敵な宝石。それこそ悪趣味だな」
再び、俺とは不釣合いの空間を歩き出した。
俺に似合うのは、墓場と地獄だ。けどよ、善人しかいねぇ天国より、堕落した地獄の方が幾分も楽しいだろうよ。遊びなれた美女と、上手い酒や酔いどれタバコもあるってもんよ。きっとな。
「アンタのそのサイレンサー、私が外してみせるわ」
去り行く俺の背に向かって、硬い靴音にかき消されないよう女が叫んだ。
「孤独を嫌いな人程、孤独に取り憑かれやすいのよ。弱い人間こそ孤独を選ぶけど、孤独になったってなんにもなりゃしないの。不器用な人間こそサイレンサーを取り付けたがる。私は、そんな男をあんた以外に知ってる」
俺と女の距離なんて知らない。そこにあるのは、男と女の価値観ってだけ。女が喚けば喚くほど、それは散り行く花のように綺麗に聞こえるのは気のせいか。
少女趣味的思考回路に、腐りきった俺の感情。決して交わる事も無く、馴染む筈も無い。
こんな場所に、入るんじゃなかった。
どうも、感情的になりすぎて困る。
外に出ようと扉に手をかけたとき、ご親切にも扉の方から開いてくれた。
目の前にあったのは、手に拳銃を持った黒いスーツ姿のおっさん。
「よう、奴さんのお出ましかい？」
男はニヤリと微笑を浮かべた。

　次の瞬間

右頬に強烈な鈍痛を喰らった。弾みで身体が左側に飛ばされ、左肩から木のベンチにぶつかった。
……ヤロウに、銃のグリップで思いっきり殴り飛ばされたようだ。
口の中に鉄の味が広がると同時に、鼻腔に血生臭さが広がった。
ベッ!! と口の中の苦味を吐き飛ばすと、それは赤く床に付いた。

軽く手を上げながら歩いてきた女が、俺の傍らで歩みを止めた。
「あんたら、見覚えがある……気がする」
女の呟きに、ようやく男が声を上げた。
「そろそろ、薬が切れる頃だろうからな」
男はそういいながら女に歩みよると、俺と同様に女を殴り飛ばした。俺の身体に女の身体がぶつかった。続いて覆いかぶさるように崩れた女の前髪を男は掴みあげると、更に頬を往復で三発ほど殴りつけてから、薄笑み浮かべて囁いた。
「お前みたいな女がひれ伏す姿が一番面白いんだよな」
最後に、俺の身体に女を叩き付けた。
「オトモダチも一緒にしてやれ！」
男が合図すると、外から更に四人の男達が俺達をぐるりと取り囲んだ。その中の二人が引きずるように連れてきたのは
「永塚!!」
相棒は泣きそうな顔で、俺等二人を見下ろしながら言った。
「いなばっち……ごめん……近付きすぎた」
男二人が永塚と俺に交互で、腹に膝打ちを、続いてグリップで背中に鈍痛を食らわせた。蹲って動けない奴の襟元を掴むと、ぐったりとしている女の上に叩き付けた。
粗大ゴミ同様積み重ねられた俺達に、男はイヤラしく呟いた。
「スパイが任務中殺されても、それは事故死扱いだ。無論、会社は責任を一切負う事は無い」
俺は苦しそうに皮肉のつもりで言い返す。
「契約だな」
「よく覚えていたな」
ざけんな。
男の引き金に力が込もり始める。
「待てよ!!」
俺は呻いた。
「なんだ、命乞いか？」
「いいや。こんな情けない体勢で死なせてくれんな。せめて、タバコの一本でも吸わせてくれよ」
その願いに、男は少しばかり躊躇したように見えた。
「別にいいだろ？ 漫画や映画じゃねぇんだ。その隙にドロンなんてありえねぇだろ」
「……まあ、いいだろ……手を貸してやれ」
ぐるりと取り囲みながら拳銃を向けていた男達が、俺達三人を無理矢理立たせた。
「さあ、タバコは俺の胸ポケットのやつにしてくれよ。吸いなれたやつが一番いいんだ」
男が様子を伺いつつ、拳銃を向けたまま俺の胸ポケットからタバコを一本取り出した。それを咥えさせ、ご丁寧にも火まで点けてくれた。
「ありがとよ」
っと、言い終わるか終わらないかのうちにフィルターを噛み潰した。
「永塚お前も吸え」

合図だ。
ベッ！ とタバコを奴らの下へと吐き出したとき、タバコのフィルターが軽く　爆破して、視界が見る見る間に煙幕へと包まれていく。
同時に俺は女の頭を押し下げながら身を低くして慌てる男達の間を駆け抜けた。永塚も同じように身を低くして這い出す。教会内からはむやみに発砲を繰り返す男達の銃声と怒声が響き渡り、俺達は丁度脇に止まっていたタクシーを強奪して走り去った。
「いなばっち、何あれ？」
「まさか、面白半分で買ったイタズラ用のスパイグッズが役に立つなんてな」
助手席で、女が呟く。
「……悔しい……」
どん！ っとダッシュケースに拳が叩きつけられた。
「……私……思い出した……」

暗殺のターゲット

今から百年以上も昔の話になる。
一人の天才だと謳われた音楽家が、パリの友人に向けてこんな手紙を残している。
『僕は今、パルマにいる。空はトルコ石、海はラピスラズリ、山々はエメラルド、そして天気は天国のようだ。最も美しい全てのものが側にある』
このとき、この音楽家は恋に堕ちていた。お相手は、男性名のペンネームを持つ少々風変わりな女流作家。
しかし些細な事を切っ掛けに、彼らは九年間の交際を経てその人間関係に終止符を打った。そして三年後、音楽家は独り静かにこの世を去った。
些細な切っ掛けが、全ての始まりと終わりを支配する。この音楽家に関わらず、物事が偶然と切っ掛けに溢れている。
人間、どこでどう変わるかなんてわかりゃしない。ましてや、終わりまで気づかない事だって多々ある。もしかしたら、殆どが気づかないまま終わりを告げているのかも知れない。

- ** **

  煉瓦色の屋根を乗せて粉砂糖色の家並みが、サファイア色の海をバックに良く映える。芸術的に奏でるクラシックの様な波の音、恋人の口付けよろしく通り抜ける柔らかな潮風。少し古びた木造の窓枠から流れ込む風は優しく、みすぼらしげなカーテンを撫でている。

金色に光り輝くお日様も、ダイアの様な星の瞬きも、これが只の観光であったならば何も問題はなかっただろう。

俺達は今、マジョルカ島、パルマにいた。
強奪したタクシーを夢中で走らせ、途中何度か車を乗り換えながら、やっとの思いでここまで逃げてきた。
あれから三日だ。地中海を眺めながらベンチで口付けを交わす恋人達も、色の濃い花々を愛でながら愛を語る夫婦の姿も、何一つ俺の気を引いてはくれない。
今更、愛が欲しいだなんて思わないが、そう感じない心に少しばかり嫌悪感を覚えることもある。

無駄なことを考えた。そう思って、タバコの火を消し、窓を閉めた。
「女は？」
ベッドで眠る女の傍らに座り、備え付けのミニテーブルでパソコンを叩く永塚に問うた。
「落ち着いたみたいだよ」
女の頬にそっと触れると、女の睫毛が少しばかり動いた気がした。
「珍しいね、いなばっちが他人の心配するなんて」
「別に。何か思い出したと呟いたきり、何も聞いてないしな」
そう、女は助手席で全てを思い出したと呟いたきり、突如高熱を出して倒れた。身体中には軽い蕁麻疹が発祥し、夢うつつに誰だかの名前を呼んでいた様に思う。女の様な男の様な名前だ。別に興味も無いからそれ以上知りたいとは思わないが。
テーブルへと無造作に並べられたウィスキーのボトルを引っつかむと、ソファーへどかっと倒れるように座り込んだ。ウィスキーのキャップを外すと、それをそのまま一気に飲み干した。
「多分さ」
特に何を聞いたわけでもないが、永塚が語りだす。
「パリで殺される予定だったのは俺達だ。G-Z なんて存在しない。そしてフォックスは、何らかの目的で俺達を嵌める為の仕掛け人にされた。彼女も俺達と同様で、一緒に殺される予定だった。と、こう考えた方が自然じゃないか？」
「女はともかく、なんで俺達が？」
奴がパソコン画面から顔を上げた。
「半分はね。会社の人材名簿をダウンロードしたんだ。オレ達二人の名前がいつの間にか抹消されている。フォックスの名前も存在しない」
「シルバー・フォックスなんて、偽名すぎる偽名だろ。どっからどう見ても東洋人だ」
俺は空いた手でタバコを咥えた。
火を点けた時、眠っていた筈の女が喋り出した。
「そう、偽名よ」
「起きたのか？」
女は大きく息をしてから言葉を続けた。
「私は貴方達と同じスパイじゃない。スパイはスパイだけど……あの会社の情報を探っていたバウンティハンター。あの会社とは無縁。あの会社を甘く見てた。だから、こうなったの。自業自得ね。とっ捕まって、薬を打たれて……結局はこのザマよ。命があっただけでも儲けもんだわ」
熱も蕁麻疹も薬の副作用か。
「何故、俺達まで巻き込まれなきゃならんのだ？」
女は言う。
「定期的に自社のスパイは消しているみたいよ。秘密保持のためだけにね。知りたい情報は掴めなかったけど、あの会社はマフィアみたいなもんで、関わると相当ヤバいってことは分かった」
改めて言うことでもないと思うが、なんとも解かりやすい情報であることには間違いない。

深く関わってはいけない、ただ与えられた任務を遂行するだけ。それが俺達、本来の仕事の筈。
俺は火を消し、二本目のタバコに火を点けた。
「女、欲しい情報ってなんだ？」
「私はバウンティハンターよ。金になる情報に決まってるじゃない」
永塚が言った。
「オレ達は、会社の仕事を真面目に充分にこなしてきた。だから、会社にとったらそろそろ潮時だってことなんだろ。銀行口座も凍結されてるし、カードだって止められちゃってるよ」
「奴等が暗殺に失敗してそれで終わりなんてありえない。ここも時期に見つかるはずよ」
「これから、どうするんだ」
イライラして、思わず口を付いて出た。その台詞に、二人とも押し黙る。
「ただ、私達が全力かけてぶつかったとしても、蚊に刺された程度にしかならないって事よ。けどね、インターポールだって奴らに目を付けてるのは少なからず本当の話。私が本当に欲しかった情報……」
そこで女が話を止めた。何だと聞き返すが、女はその続きを頑として話そうとはしなかった。
俺もそれ以上は聞く気もなくなって、半分ほど燃え尽きたタバコの続きを吸った。

ばいばい

「いなばっち、どこ行くのさ？」
部屋を出ようとした矢先、永塚に呼び止められた。
「散歩」
「あんまり出歩かない方がいいよ」
「ほっとけ」
こう時化た部屋にばっか篭ってたんじゃ、脳味噌もろとも腐りそうだ。ハエが頭上を飛び回る前に、少しくらいは気分を入れ替えたい。
いつ触ったんだか分からないようなひんやりしたドアノブを回し、「直ぐ帰る」とだけ告げて外に出た。
小汚い安モーテル。すれ違う客なんて居やしないが、時折見かける店員は愛想が悪い。
建てつけの酷く悪い廊下は歩く度ぎしぎしと悲鳴を上げ、その度床が抜けるんじゃないかと内心不安に思う。胸ポケットからタバコを一本取り出すと、歩きながらに火をつけた。息を吸う度タバコはプラムの様に赤く燃え上がり、その〝寿命〟を刻んだ。
久々にお目にかかった外の天気は見事な青空。暑いぐらいにその熱は己の皮膚へと浸透する。オヒサマの恵みの光が眩しくて、つい目を細めてしまう。そんな俺を無視して、ゆっくりとしたパルマの風と午後の時間は駆け抜ける。
近くに海岸、丁度いい。
あの窓枠に仕切られた向こう側を、間近に見てみたくなったというのも事実。
俺は、海岸に向かって歩き出した。
近くにあった備え付けの白い階段を、トントントンっと小気味良く降りる。

……海岸に着いて、早々だが……ここへ来たことに後悔した。
見渡す限りカップルばかり。なんだここは？？？
どっと脱力し、思わず肩を落とした。
そういえば観光地なんだから仕方ないと思い、なんだかこのまま帰るのも勿体無くて、近くの開いていたベンチに腰掛けた。
暫く座っていただけだったのだが、そのうちかったるくなってきてゴロンと横になった。
鳥が一羽、二羽……。ゆっくりと視界を横切っていった。
いちゃつく目障りなカップルさえ視界に入らなければそれでいい。風も海も潮の香りも、全てが極上品なのだから。

気づけばそのまま眠っていたらしく、俺の目を覚まさせたのは頬に触れる冷たい何かの感触。
「風邪引くよ」
女の声がした。
「ああ、なんとかは風邪引かないんだっけ」
ゆっくり目を開けると、女が顔を覗き込んでいた。手にはよく冷えて汗を掻いた、コーラの瓶が二本。
身体を起こすと、大きな欠伸が一つ出た。なんだか、ダルイ。
「寝てたんじゃないのか？ もういいのか？」
「あら？ 心配してくれてんの？」
女はそうケラケラ笑いながら、コーラ瓶を差し出してきた。遠慮する理由もなく、俺はそいつを受け取ると一口飲んだ。
「もう、大丈夫」
女は少しばかり寂しげにそう言うと、俺の隣に腰掛けた。
「何の用だ？」
「別に、用なんて無いよ」
「そうか」
暫くの間、沈黙と言う名の時間が過ぎ去る。今、話をするかの様に音を立てているのは、瓶の中の炭酸水だけ。しゅわしゅわしゅわと、ただなんとなく音を立てている。
「小さい頃さ、瓶の中に手紙を詰めて流したら、誰の手に渡るんだろうとか考えたこと無かった？」
最初の会話となった女の質問に、無愛想にも「無いな」としか返答が出来なかった。また無愛想だとか夢がないだとか言われるんだと思ったら、案外そうでもなかった。
「私もないな。だってさ、海が近くなかったもん」
女が瓶を投げた。瓶は放物線を描きながら、太陽の色にキラリと光り、静かな海にポチャリと落ちた。
「何の話だ」
「でも、風船に乗せて……なんてのは考えた。きっと、この世界のどこか遠くの誰かの手に渡って、その人と親友になれたらな、とかね」
「似合わず、ロマンチストだな」
俺も中身を飲み干すと、女と同じように瓶を投げた。瓶は女の投げたものより大きく放物線を描き、太陽の色を受けてきらきらと光って落ちた。
「それで、風船に手紙はつけたのか？」
俺にとってはどうでもいい質問だった。
「つけなかったよ。風船が無かったの」
「そうか」
妙な距離だ。俺と女の距離は、波の音一枚で仕切られている。そう、感じた。
再び俺はベンチに腰掛けた。女が喋る。
「貴方に殺される、それが私の最後だといったわよね？ 記憶を戻す代償だと。記憶が戻った今、覚悟は出来てる。けどね、一つだけお願いがあるの」

「なんだ？」
「一つだけ、一つだけやりたいことがある。それが終わるまで待って欲しい」
「逃げてみるか」
逃げたいのなら、逃げればいい。逃げれば……。
だが、女は言葉の代わりに首を左右にゆっくり振った。
「今度こそ死ぬかも知れない。貴方達に初めて出会った時、躊躇なく人を殺した。そうしなければ、私の目的が達成出来ないと思ったから。他人の命と同じように、私の命も躊躇しない」
そして女は歩み寄り、ただ、座っているだけの俺の身体を一度だけ抱き締めると、耳元で「ばいばい」とだけ囁いた。不思議と、何故だか拒絶間はなかった。
「なんの真似だ？」
だが、こんな自分の無愛想さにはほとほと嫌気がさす。
「……もし戻ってこれたら、貴方が私を殺しなさいってことよ」
「言われなくとも」
俺を置いて歩き出す女。俺はイラつく気分を悟られないよう、タバコを取り出し火を点けた。何故こんなにもイライラするのか、自分にも分からない。そんな自分自身へ、更にイライラした。もっと気の利いた台詞が並べられたのなら、もっと器用な男だったら、正直そう思った。
女が踵を止めた。一度だけ振り返り
「私を殺すのが貴方なのと同様に、貴方のサイレンサーを外すのも私だからね」
そういい残し、その場を走り去って消えた。
残された俺と、俺の持つタバコから立ち昇る紫煙。まるで亡霊のようにゆらゆらゆれて、その姿を掻き消した。
こいつが吸い終わってからもう一本タバコを吸った。二本目を吹かし終わってから、モーテルへ戻ることにした。

** ** *

妙な夢を見た。
真っ黒な空間、闇の中に俺は独り立っていた。特に動揺する訳でもなく、焦る訳でもなく、ただただ静かな感情でそこにあった。
やがて俺の周りに一つ、また一つと小さな明かりが現れ始める。それが何なのか目を向けると、細く、柔らかで今にも消え入りそうな蝋燭の炎であった。その華奢なオレンジ色も時期に終わりを告げ、最後に大きなステンドグラスの窓枠が姿を現した。ステンドグラスの中で聖母マリアが俺を見下ろして、微笑み向ける。そこから溢れ出す七色の光の筋が煌々と俺を映し出した。光の眩しさに思わず目を細めたとき、その光が降り注いでいるのであろう天から、アヴェ・マリアの賛美歌が降り注いできた。
ふと思い出す幼き思い出。クリスマス、感謝祭、誕生日……ことあるごとに賛美歌を歌わされたものだ。俺はそれが苦痛以外の何でもなくて、決まって教会を抜け出してはガ

キにも村の連中にも〝あばずれた子供〟〝悪魔の申し子〟等と、素敵なニックネームで呼ばれたものだ。それでも神父だけは何も言わずに、ただただニコニコと俺に笑みを向けていた。
だがある日、俺は突然神父に首を絞められた。曰く、その時教会には神父以外に神父の妻である修道女が住んでいたのだが、この修道女を俺が抱いたというのだ。
元々修道女は俺の事を酷く嫌っていて、よく神父に追い出すようにと愚痴っていたのを知っている。
無論、俺自身もこの修道女の事は嫌いだった。豚の様に白く肥えている割には、やけにめかし込んでいて気持ち悪かったし、性格も酷く歪んでいたからだ。いつも口には真っ赤なルージュを引き、目元はブルーとぼさっとした睫毛で死人のようだった。
その上、いつも首からはエメラルドの乗ったロザリオを下げていたのが印象的だ。ガキ連中の間では、魔女と呼ばれていた。
魔女は決まって、俺を見かけるたびその醜く腐った目で睨み付けては、まだここに居るのか？ などと問いかけてきたものだ。
時折、食事の中に蛙や芋虫が浮かんでいたり、ベッドが水浸しになっていることもあった。
ああ、また魔女の魔法かなんて思ったものだが、そんな俺を哀れに思い、優しくする神父がまた修道女は気に入らなかったようだ。だから、こんな嘘をでっち上げたのだろう。あんな豚魔女を抱くぐらいなら、そこいらの乞食でも抱いていた方がまだましだと思った。

\everypar{\null}『私はあの悪魔に犯されました』 \newline

魔女の嘘を信用した神父に酷く腹を立てた俺は、その晩動かなくなるまで神父を殴りつけ、教会を飛び出した。
やはり、神など居ないと再度確信した。
夢の中でそんな遠い思い出を浮かべ自嘲した時、そこにあった全てのモノが一瞬にして消えた。
次に現れたのは、蝋燭でもステンドグラスでも、ましてや神や天使なんかではない、数日前に起こったあの教会での出来事がそのまま再現されていた。永塚と女、そして俺が立つ薄汚れたちんけな教会。そして銃口を向ける数名の男達。
男が囁く。
「ジ・エンドだ」
そして銃声。銃口から立ち上る硝煙の先には、赤い薔薇を散らすかの如く背後に吹き飛ぶ女の姿。
「……に……げ、て……」
女の口から言葉と共に真っ赤な液体が、こぽこぽと溢れ出した。
間髪入れずに二発目の銃声。今度は俺が倒れる番だった。
胸に焼き付けるような鈍痛と、重くのしかかる瞼。一気に夢へと誘い込ませるような闇が徐々に視界を覆い始めると、そこで俺の夢は終わり、同時にベットから飛び起きた。
「大丈夫？」
永塚が俺の顔を覗き込んで、様子を伺う。

「いなばっち、酷いうなされ様だったよ」
そんな永塚の身体を軽く押し退け立ち上がると、ふと女が居ないことに気付いた。
「永塚、女は？」
「さあ、いなばっちが散歩に出かけた直後出ていって、それっきり戻ってないよ」
頭を過ぎる。
『ばいばい』
あれはそういう意味だったのか。
なんだか、無性に恋しく感じた。それが何かは分からない。わからないけれど、心にぽっかり穴が開いた様な気分を味わっていた。それから、妙に鮮明に残る、あの腕の温もりと感触。
タバコを吸おうとしたが、最後の一本は吸い終わっていたらしく、ソフトケースだけになっていた。代わりにそれをぐしゃぐしゃと丸め窓から、二人して投げたあの空瓶のように放ってはみたものの、それは放物線を描いただけで海にまでは届かなかった。
いつしか外には月と、無数の星の影。

オメルタ

多分、あれから俺は女を待っていたんだと思う。
あれ程までに、殺したく思っていた女を。
けど、今は殺してしまう気など微塵もなく、寧ろもう一度会いたいとさえ思っていた。

きっと会えば、もう一度殺してやりたいと思うに違いないと。 \newline
その時こそ、鉛弾をあの女の胸中にブチ込み、全てに終止符が打たれるんだと。

始まってもいないなにかが、終わるんだと。 \newline

俺が女を恐れてるのか？
まさか……。

『拝啓、Mr. 稲葉。並びに Mr. 永塚。
当社では Mss. シルバー・フォックスを手厚く保護しております。一週間以内に姿を現すこと。お二人を熱く歓迎いたします。但し、一週間以内にお迎えにきて頂けない場合、Mss. フォックスが貴方方二人の前にどの様な姿でご帰還致しましても、当社としては一切責任を負うような真似は致しませんのであしからず。ご理解ある判断を、お待ちしております。

敬具、ハンプティ・ドロ』

会社から永塚のパソコンへとそんなメールが届いたのは、女が出て行ってから一週間と経たない午後の日の出来事だった。

- ** **

  この業界で同じ会社で長くは働けない。働けば働く程、邪魔者扱いされて終いには殺される。にしても早過ぎはしないか。こうなってしまっては、考えても仕方ない。

むざむざと殺されるつもりも無ければ、女を殺させるつもりもない。女を仕留めるのは俺だ。仮に出向かなかったとしても、俺達だって後々殺される運命なのは間違いない。無論、大人しく出向いたとしても、生きて帰れる保障はゼロに近い。
何も知らぬまま只の犬死に終わるのも口惜しいだけなので、ある程度の内部事情ぐらいは探ってやろうと考えていた。
そしたら先に永塚の方がそう考えていたらしく、既に実行へと移していた。
そう、ここパルマのモーテルに来てからずっとパソコンを弄っていたのはその為であったのだ。
全く頼りになるのかならないのか知らないが、最高の相棒だ。
調べ上げた情報を小型のプリンターに接続し、印刷にかける。耳障りな機械的に軋んだ音と共に、白く粗末な紙へと英文が写し出される。それを順に並べて、永塚が俺に「解り易くまとめたんだ」と渡してきた。
そいつを無造作に受け取ると、ざっと目を通した。
「これって」
思わず口走った俺の顔を逆さで覗き込むように、見上げる。椅子の角度はバランス悪く、自分の体重をテーブルに掛けた足で支え、頭の後ろで両手を組みながら不真面目なのか真面目なのか分からない笑みを向ける。まるで、テスト数分前の学生だ。そして永塚が体勢はそのままに、ポツリと解答を教えるかのように呟いた。
「オメルタ」
オメルタ＝マフィア用語で、沈黙の掟を示す言葉だ。
「多分、そこにまとめたのはほんの一部。だけど、それ以上はどう足掻いても引き摺り出せなかったんだ。それでも重大な秘密情報だ。殺される価値は充分にあるよ」
例え同じ穴であっても、内部情報を知り得てはいけない。それがマフィアの常識だ。それらは秘密組織であり、政治家、政府高官、実業家等と癒着し、社会の奥へ奥へと深く入り込んでいる。更にはテロ化し、政治、経済をじわじわと侵食していく。もちろん、国は事態を重く考えている。だからといって簡単に排除できる問題ではないのだ、こればかりは。
永塚の情報からすると、裏ではいくつかのチームが編成されているようだ。但し、書面として書かれているものはあくまで引きずり出す事が出来た程度の情報であって、更なるチームが存在する可能性は高い。
・密偵（ スパイ ）
・暗殺
・小型兵器開発
・大型兵器開発
・薬物開発
・コンピュータープログラム開発
・贋金造り
そして、不可解な社員の死亡に関する記録記事。
頭にはローマ字で、〝ランゾウ　ヨネザワ〟と書かれていた。
・薬物開発チーム所属

・精神障害による、飛び降り自殺
・遺書無し
その下には英語で書かれた名前〝エドワード・スミス〟。
・小型兵器開発チーム
・職務中、機械からの漏電による感電
・事故死
更にその下にも英語で〝ミシェル・ラナー〟の名。
・薬物開発チーム
・突然の心臓発作
・病死
そして、〝他二十四件有〟との一文。
「永塚、他二十四件ってなんだ？」
「数は確認出来たんだけど、詳細が引っ張り出せなかったんだ。三件上げたところで、見つかりそうになったから」
「詳しい個人情報は？」
「駄目。一回切断してから、速攻で奴ら更にセキュリティ強化してるんだもん。何度やっても、再度侵入できなくてね。お手上げです」
大きな溜め息が漏れる。
「ＣＩＡが血眼になって奴らの証拠を叩き出そうとしてるらしいんだけど、普通に叩いたところで埃一つ出てきやしない。どうやら、ハンプティ・ドロはイタリアマフィアの関係だろうって事でさ。ＥＵ連合の方でもマフィアについて厳しく取り締まり強化命令が出てるし……」
「それで本社をシカゴに？ ICPO も動いたって訳か……」
「そう考えるのが尤もだね」
そして、暫しの沈黙の後、俺が口を開く。
「この情報は、何らかの証拠にならないのか？」
永塚が首を左右に振った。
「死因自体が警察の判断だよ。オレらが考えるより先に、警察の方が考えてるでしょ。只の書類だけじゃ証拠不十分だし、下手したらバレてオレ達の方がコンピューター誤用法で捕まっちゃうよ」
万事休す。そう思ったときだった。何かを思い出したかのように、永塚が言葉を作った。
「……只一つ……望みは無くはないんだよねえ」
「なんだ？」
「可能性は、無いに等しいよ。けど、希望はある。ハンプティ・ドロと証券だけでなく、貿易関係としても親しい実業家でロバート・ルーサー氏って人がいるんだ。警察も目は付けてるみたいなんだけど、証拠が上がってないんだよね」
「何が言いたい？」
「麻薬の取り引きを行ってるらしいってこと」
上手くやれば薬物取締法には、引っかかるって事か。
いい事を、思い付いた。

俺は持っていたプリントをテーブルに置くと、タバコを一本取り出した。火を点け、ゆっくり三回程口から吐く紫煙を見送ると、同時に永塚もまた新しいタバコを取り出し、吸い始めた。
奴のタバコが半分程燃え尽きたのを見計らい、俺は切り出す。
「賭けるか」
「え？」
永塚の間抜けな返答に、ニヤリと笑みを浮かべる。
「お前は逃げても構わないんだぜ。俺は女を殺す、それは今でも変わらない。けどよ、むざむざと逃げ回った挙句、勝手で殺されるのも勘弁だ。やれるだけの事はやってみる」
女を殺す。
まだそんな気が起きない、ただ会いたいだけだ。
会って、確かめたいだけだ。
この胸の空白がなんなのか。
「いなばっち、なんでそんなにあの子にこだわるのさ。別にこのままほっといても構わない程度の仲だろうに」
「なんでかな、俺にも分からん。わからんが……」
別に永塚を巻き込む気なんざさらさらない。元々独りが似合う性分の俺。奴と居る事自体、何故だか自分でも不思議なくらいなのだから。
「飽きたのかもな。代わり映えのしない景色に」
タバコを咥えたまま俺は背を向けた。
「まあ、ここまで来たんだ。オレも付き合うよ」
なんて、奴の声が俺の背後へと叩き付けられたのは、丁度ドアノブを回そうとした瞬間だった。

メロス作戦

民間旅客機にて数時間、アメリカ合衆国イリノイ州の大都市シカゴ到着。
貧困、麻薬、銃規制、人種、虐待、エイズ等、アメリカの持つありとあらゆる問題をこの街は抱えているそうだ。
興味もないし、住んでいる訳ではないから、俺にとっては何の問題もない。
シカゴは鉄道、海軍の拠点として発展し、アメリカ第二位の経済、金融拠点、五大湖工業地帯の中心となっているらしい。ただニューヨークに次ぐ大都市と言われたこの地区も、ロサンゼルスの台頭、五大湖近辺の地位低下、都市圏拡大の為と、人口も以前より九十六万人程減少してしまったそう。
しかしアメリカ型都市の発祥とも言われる街並みは摩天楼が建ち並び、ダウンタウンには近代的なビルディングが聳え立つ。その迫力は、人口の衰えを感じさせない程だ。中でもシアーズタワーは、かつて世界一の高層建築として知られた。
俺達が最初に降り立ったのは、七千エーカーという壮大な敷地内を持つ、世界的にも有名なオヘア国際空港。空港内はまるで、一つの町のようだった。案内所からレストラン、珈琲ショップ、トラベラーズ・エイド、ギフトショップ、ロッカー、郵便局、ビジネスセンター、おまけにチャペルまでもが揃っている。
流石に世界一忙しい空港と言われるだけあって、色々な顔ぶれが砂糖に群がる蟻よろしくウジャウジャしている。そんな人ごみを潜り抜け、俺達は足早に外へと飛び出した。
外は思っていたより寒く、持っていた荷物からファー付きの黒いブルゾンを取り出すと、それを羽織った。
別名〝風の街〟と呼ばれるこの国は、ミシカン湖から吹き付ける季節風の影響もあり、冬の寒さはかなり厳しいと聞いた。
降雪はさほど多くはないそうだが、冷たい風によって直接肺がやられるというから尋常ではないと言えよう。
また、夏は夏で温暖な南西風の影響により非常に暑く、年間通しての気温の差が極端に大き

まだこの国にしては冷えすぎない空気を肺一杯に吸い込むと、タバコを咥えて火を点けた。

「これからどうする気？」
永塚が心配そうに問いかける。することは決まってる。
「お前は先に会社に行っててくれ。行って、俺が三日以内に現れる迄待てと伝えろ。要は人質だ」
「人質!!」
素っ頓狂な声で相棒は叫ぶ。

「時間が欲しいんだ。付き合うっつったろ？」
ギロリと睨む、俺。
唖然とする永塚を尻目に、近くで路上駐車されている車に近付いた。キーホルダー型のピッキングツールで簡単に鍵を外すと、続いてハンドルの下から無数の配線を引っ張り出して直結する。
幸い車の型が古かった為、ロックも掛からず安易にエンジンが起動した。
「乗れよ」
「あ！ ああ」
二人、乗り込んだのを確認すると、オヘア空港から南東へと車を走らせた。
会社ハンプティ・ドロは、ここからさほど遠く無い。向かう車の中で、不安に顔を歪めながらポツンと永塚が呟いた。
「……どうなるんだよ、オレ達……」
その声色は今にも泣き出しそうだ。
「大丈夫だ。一応作戦はある。俺だってまだ死ぬつもりはねえよ」
保障ははない。根拠も……ないに等しいが、ゼロではない。けれど、死ぬつもりがないのは本当だ。
だが
「ポテト買ってきてって頼んだのに、オニオンリング買ってくるような奴、どう信じたらいいんだ」
と、頭抱えて悩みだす。
失敬な奴だな。オニオンリングは関係ない。しかも、一回だけだ。
反論するのも面倒で黙っていたら、いつの間にかループ地区と呼ばれるシカゴの中心地区へと辿り着いた。
ここは所謂ビジネス街だ。高層ビルに囲まれた細い路地は、なんとも息苦しい。見事に連なる超巨大ビルのせいで、広い筈の道路ですら圧迫感を覚えてしまう。
俺は車を止めて永塚を降ろした。ここから五分程歩いた所に、俺達の会社ハンプティ・ドロの本社がある。
「頼むよ」
血相変えて呟く永塚に「任せとけ」とだけ言い残し、その場を去った。

女に拳銃は似合わない。
火薬の匂いも、スーツの無機質さも、血の赤も、その匂いも、悲しみの重さも全て男が背負えばいいものだ。女が背負うべきものではない。
例え拳銃の不器用さがスパイシーな香りを放ち、女の魅力を引き立てているのだとしても、時には手放すべきだと思う。
女に似合うのは香水の香り、ドレスの華麗さ、口紅の赤、薔薇の美しさ、宝石の煌びやかな瞬き……。
そして、涙という武器がある。

証言

部屋はだだっ広いだけであり、艶やかな金の装飾や光沢加減の目立つ綺麗な木目の茶に彩られ、更にライトはセピアの色味を帯びている。
いかにも金持ちの好きそうな、趣味の悪いデザインってだけ。
きらきらと頭上輝くシャンデリア。いつか見た不似合いな光景。と、壁に飾られた名画の数々。モネやらゴッホ等といった有名絵画も、煌びやか過ぎるこの部屋では只の油絵にしか見えない。
「ジョルジュアン、お茶を」
この家の主人、ロバート・ルーサーが自分の執事の名を呼んだ。
酷く白髪交じりで皺だらけの、デブ親父だ。その貪欲な声色に、胸焼けを催させる。
「はい、ご主人様」
健気な執事は深々と頭を下げると、上品な物腰でその場を一旦離れた。長身のスマートな身体にオールバックの黒髪が映える、まだ若い男なだけになんだか嘆かわしく見えた。
十分程して、ジョルジュアンは現れた。銀色のカートには鈴蘭の模様が施されたブランド物のティーカップセットとティーポット、湯の入った陶器の水差し、角砂糖の入った容器、そしてスライスレモンの並べられた皿が乗っている。
「お待たせいたしました」
デブはジョルジュアンの律儀な態度に感謝するどころか
「遅いぞ」
と、文句を垂れるだけであった。
「申し訳ございません」
それでも執事は嫌な顔一つせず、一言詫びるとお茶を入れだした。
お湯を注いでカップを温めると湯を捨て、その中にレモンスライスと砂糖を二つ入れた。
その上から熱い紅茶を注げば、なんとも芳しい紅茶の香りが鼻腔をくすぐる。
「どうぞ」
「うむ」
やはりデブは礼一つ言わずにカップを受け取ると、二、三回レモンスライスをティースプーンで弄んでから一口飲んだ。そして執事に向き直りながら癇癪を起こした。
「いつもより砂糖が少ないじゃないか！」
また執事が頭を下げるとでも思ったのだろうか。
だが、デブ親父の振り向いた先にあったのは、執事が向ける一丁の拳銃。その銃口は、凶器に満ちた目で彼を捉えている。
「……ジョ……ジョルジュアン……何の真似だ？」
呼ばれた執事、すなわち〝俺〟はニヤリと口元に微笑を浮かべた。

「自分の執事の顔も声も忘れたのか？」
デブの身体全体がガタガタと震え始め、手に持ったティーカップとソーサーがぶつかってカチャカチャと音を立てる。同時に汚いシミだらけの顔が、みるみる間に青く変色していく。
「な、何が目的だ？」
不規則に揺れるカップから紅茶がこぼれ、デブの手とズボンに濃いシミを作った。
「おいおい、大丈夫か？」
俺がからかう様に言うと、デブは益々顔を青ざめた。
「こんな事をして……たっ、ただで済むと思ってるのか！」
俺は構えた拳銃の引き金へと力を込めながら言った。
「さて、時間が無いんだ。命が惜しいんだったら証言してもらおうか？ ハンプティ・ドロとの麻薬取り引きについて」
デブが押し黙った。
「……ＣＩＡが調査してる。だが何も浮上してこないんだ」
デブの目が忙しなく泳ぎ始めた。
「黙秘権か。いいさ、ならその耳を削ぎ落とした後、そこに付いてる指を一本一本潰してみるかな。それでも黙りこくったままなら、ご褒美にマグナム（ こいつ ）の鉛弾でも食わせてやるよ」
俺は一歩踏み出した。
「待て!! 待ってくれ！」
アンモニアの匂いが鼻を付いた。デブが垂れ流した小便が、床に敷かれた高そうなカーペットに大きなシミを作った。
「……いい話があると言ってきたのは向こうだ」
銃を構えた反対の手で、ポケットに忍ばせた小型録音機のスイッチをオンにした。
デブが続ける。
「始めは、乗り気じゃなかったんだ。だが、絶対にバレないと言うしから試しに……そしたら面白い程儲かった。そのあと、ジーメンやＣＩＡ、おまけにインターポールまで乗り込んでは来たが、事前に向こうから情報が入ってきて、その通りにしたら不思議とバレなかった」
「いつ、どこで、取り引きは行われる？」
「その時によって違う。だが大抵はＡ区の三番バックストリートだ。いつも朝四時半に待ち合わせる。取り引きする人物は毎回違う」
「それで」
「た、助けてくれ!! もう充分だろ！ 命だけは助けると約束したはずだ。アンタの事も言わない。だから頼む!!」
俺は一瞬ためらうと、構えていた拳銃を戻した。
「そうだな。貴様をぶっ殺したところで、これ以上俺にメリットもねぇし」
静かに踵を返した。
だが
直後、空気を震わす一発の銃声が、けばけばしいだけの室内にこだました。

僅かに、俺の方が早かった。
仰向けに音も無く倒れ込むデブ。眉間からはどくどくと真っ赤な血液が溢れ出ている。
その右手には、護身用だと思われるデリンジャー。
一度だけその光景を鼻でわらうと、俺は何事も無かったかの様にその場を後にした。
「殺されるぐらいなら、殺すさ」

男が背負うもの

近くで見上げると、益々感嘆して息を飲み込みたくなる程立派な超巨大ビル。〝悪の秘密組織〟とでも言おうか、これが俺達の会社、正確には元会社の〝ハンプティ・ドロ〟本社だ。
入り口にガードマン。その間の、金とガラスで作られた自動式回転扉を抜けると、大理石で作られたロビーがお待ちかねだ。
金髪美人の受付嬢が、笑顔で出迎えてくれた。
「どうも」
無愛想に挨拶すると
「いらっしゃいませ」
と、愛想良く返された。
「社長はいる？」
「どちら様でしょうか？」
「稲葉剣悟」
「稲葉剣悟様ですね、少々お待ちください」
受付嬢は軽く会釈をしながらそう答えると、バインダーを引っ張り出し、何やら調べだした。
どうもこういう場所は苦手だ。マニュアル通りの丁寧な対応というか、作られた愛想の良さと言うか。悪い気はしないが、俺には不釣合いな気がしてならない。
暫くして、受付嬢は答える。
「失礼ですが、本日面談のご予約がされていない様なのですが……」
そうだろうね。
「おかしいなあ。緊急で呼ばれたんだがな。それもパリからだぜ。社長に直接聞いてやってくれよ」
横柄な俺の態度に気を悪くしたのか、美人受付嬢の眉間に皺が寄せられた。
「かしこまりました。今確認を取りますので、少々お待ちください」
やはりマニュアル通りだ。お客がどんな態度であっても、不快な思いをさせない様にとでも教育されているんだろう。確認を待つ間、近くにあった灰皿の側でタバコを吹かすことにした。
暫くして受付嬢は言う。
「稲葉様、今確認が取れました。最上階、右奥のお部屋になります」
俺は吸いかけのタバコを灰皿に落とした。そのときの、火の消えるジュッと言う音が何故か妙に可笑しかった。

「メルシィ・ボク!!」
やはり受付嬢は、最後の最後まで上品に頭を下げる。
「いってらっしゃいませ」
エレベーターは、案の定ガキが喜びそうな全面ガラス張り。デザインに拘ったのか、回数を表示するのは点滅板ではなく、分度器型のメーターの上をアナログに針が動くもの。おまけに液晶テレビが組み込まれていて、延々とニュースが流れているのだ。
最上階百八十階を押して、無意識に溜め息を吐いた自分に気付く。
そう、ハッタリがどこまで通用する相手かは分からない。それでも、生きて帰れる可能性が少なからずあるのであれば、それに賭けてみない理由は無い。
マグナムの状態を確かめてみる。無駄な行為と分かっているのに、何かしていないと落ち着かないのだ。
弾倉には弾も一杯だし、シルバーに輝くボディには曇り一つ無い。
グリップに違和感も無ければ、標準に乱れも無い。
それなのに、いつもよりずっしりと重く感じるのは俺の気持ちか。
そんな俺の気を無視して、エレベーターは最上階に到着。
チン！ と軽いベルが鳴り響き、扉が開く。二回程深呼吸を繰り返してから、一歩踏み出した。と、同時にエレベーターの扉が閉じられて、ちょっと驚く。
何をビビってんだと自分に喝を入れなおすと、社長室に向けて廊下を歩み始めた。
己の心とは正反対に、手垢一つ無い大理石の壁が続く。そして床を埋め尽くす清潔感溢れるグレーのカーペットに汚れはなく、時折置かれた高そうな大きな花瓶には溢れんばかりの真っ赤な薔薇が飾られている。
先程の受付嬢に右奥と言われたが、俺の乗ったエレベーターからは直ぐだったらしく、迷わず到着した。
木目の揃った茶色の扉は金で装飾され、小さなダイアの埋め込まれた金プレートには〝社長室〟と掲げられている。
金色のドアノブに手を掛けたまま一瞬躊躇う。が、いつまでもこうしてはいられない。覚悟を決め、ゆっくりとドアノブを回した。
そして、最初に俺を出迎えてくれたのは、無数の銃口であった。
「この会社は訪ねてきたお客人にいきなり銃口を向けるんだな。入り口の受付のおねえちゃんとは大違いだ」
皮肉でも言わなきゃやってられない。
「貴方こそ、部屋に入るときはノックぐらいしろと教わらなかったのかしら？」
貪欲な女の声がした。少し低めで、自信に満ち溢れた声。なんとなく寒気を覚えた。
「生憎そんなに育ちが良くないんでね」
どでかいディスクの向こうで、女が椅子に座ったまま微笑を浮かべて言った。
「そうでしょうね。まぁいいわ。初めまして、Mr. ケンゴイナバ。私が、社長のジュディエッタ・グラッチンよ」
イタリア訛りの英語が響く。
「俺達のトップが女だったとはね」
「あら、うれしい？」

金色にウエーブ掛かった髪と、真っ赤なスーツ。胸元まで開けられた濃い色のブラウスから覗く肌は白く、下品なまでに感じる胸の谷間が俺の癪に障る。口元に塗られたルージュは、まるで人を食った様だ。
「お生憎様。俺は、年増は趣味じゃないんだ」
ジュッディエッタが鼻でわらった。
「奇遇ね。私も小僧は趣味じゃなくてよ」
そして指をパチンと鳴らす。
「鼠が二匹。これで三匹ってところかしらね」
黒いスーツの男達に引き摺られて出てきたのは、永塚と女。二人が投げ捨てられるようにして、俺の側に寄せられた。
女社長は言う。
「貴方達は会社の為に、有能に働いてくれた。感謝してるわ。だけど、少しばかり仕事をしすぎちゃったの。それからそこの女、余計な事してくれて。どれだけの損害が出たか分かってるのかしら？」
女が声を張り上げた。
「ふざけるな!! 大量虐殺、戦争、全てアンタの理想である〝独裁〟化の為だろ!! アンタの贅沢一つの為に、世界がめちゃくちゃになるって解ってない訳」
「独裁の戦争の何が悪いっての」
女社長の凍てつく笑いがこだました。
「解ってないのはアンタよ。ドブ鼠の分際で偉そうに。戦争はね、立派なビジネスよ。私の為に世界がどうなろうが関係ないの。要は金のよ、儲かるのよ。戦争は」
狂ってる。
「もう終わりにしましょう」
俺達を取り囲む黒い男達が一斉に銃を構え直した。ここで全員、蜂の巣にする気だ。
「待てよ」
俺なりに悪足掻きをする番だ。
「タバコなら吸わせないわよ」
女社長がニタリと笑う。
「ちげえよ。折角だ、一つ取り引きしないか？」
「取り引き？」
「そう。アンタだって、こんなしょうもない事で上げられたくは無いだろ？」
女社長の眉根が潜む。
俺は、例の録音機のスイッチをオンにした。
『「……り気じゃなかったんだ。だが、絶対にバレないと言うしから試しに…そしたら面白い程儲かった。そのあと、ジーメンやＣＩＡ、おまけにインターポールまで乗り込んでは来たが、事前に向こうから情報が入ってきて、その通りにしたら不思議とバレなかった……」』
室内に流れるのは、ここに来る前射殺したデブの声。
女社長が呟く。
「そんな証言。いくらでも潰せるわ」

「だろうな。それでも折角だからこいつをな、とりあえずジーメンに送りつけてやったんだ。そしたら奴ら大感謝。だからお願いしたんだ。俺達が帰還するまで捜査は待ってくれって。もし俺達が戻らず、死体が上がったとしたらどうなるか、賢いアンタならよく解るだろ？」
ガクンと、女社長の頭がうな垂れた。唇の端を噛み締めながら、怒りに震えているのが良くわかる。笑っているような、限界までに怒りの込められた声で呟く。
「……銃をおさめな……」
銃を構えていた男達が、銃を構えたまま困惑しながらお互いと社長の姿を見合わせた。
更に女社長が怒鳴りつける。
「おさめろっつってんだろ!!」
俺達の目前から銃口が下げられた。
「いいわ、今回は貴方達の望み通り逃がしてあげる。けどね、覚えておきなさい。地獄の果まで追いかけていってでも、貴方達三人は必ず殺すってこと」
これで、俺達は死ぬまで追われる身って事だな。
「帰るか」
二人に言い、最初に俺がドアノブへと手を掛けた時。

――　一発の銃声。

そしてその後直ぐ、もう一発の銃声がして、同時に女が背後に叩きつけられた。
女の手には、見慣れたマグナム。……俺の？
ふと視線を落とすと、綺麗だった筈のドアノブと扉に、真っ赤な血糊が飛び散っていた。
「……んだ……こ……れ……」
同時に焼き付けるような痛みにも耐えかねて、膝からガクンと崩れ落ちた。
丁度左脇腹の痛みの主に手を当てると、何故かぐっしょりと濡れていた。強烈な眩暈と吐き気が、同時に押し寄せてきた。
「……卑怯者め……」
俺のマグナムを構えたまま、体勢を立て直して女が毒吐く。
揺れる視界で顔を向けると、女社長は右手を押さえたまま、冷たい視線で睨みつけていた。俺は永塚に支えられ、女は社長に銃口を向けたまま部屋を出る形となった。
エレベーターに乗り込むが出血は酷く、益々視界に霞が掛かり始める。
「いなばっち死ぬなよ、こんな所で」
泣きそうな声で永塚が言う。なんて声だ、情けねえ奴。哂ってやりたいが、残念ながらそんな余裕も無い。
身体は寒い筈なのに、何故だか多量の汗が滴り落ちる。震える指が、俺の目元の汗を拭い去った。
「馬鹿。なんでさ、なんで来たのさ。あの時、さよならって言ったのに。来てなんて一言も言ってないのに……」
目に涙を一杯溜めながら、泣き声を必死で堪えているのか、掠れた声で女が呟く。五月蝿い女だ。

「う……ぬぼれ……んなよ……。お前を……殺すのは……俺だ……と、言った筈だろ……」
一言一言が傷に響く。なのに……なぜ、口だけは勝手に動くのだろうか。
よく聞く話。有名な話。殺し屋が殺される時は、自分を殺す銃声だけは違う音色に聞こえるという。
俺には同じ音色にしか聞こえなかった。それは俺が殺し屋ではないからか、はては殺される訳ではないからか。どちらにしろ、長生きはできなさそうだ。
「ふえ」
気の抜けた泣き声が、女の口から漏れた。こっちまで気が抜けそうだ。
俺は、血に濡れた手で女の唇をゆっくりなぞった。真っ赤な血が、まるでルージュを描いているかのように見える。
「綺麗……に……してから……死ね。ベッド……で……。薔薇と……香水と……ドレスと……」
「もういいよ、いなばっち喋んなって!!」
エレベーターのチン！ 言う軽快な音が遠くに聞こえた。扉が開く瞬間だったと思う。唇に温かく柔らかい感触を覚えたと同時に、俺の意識は幕を閉じた。

** ** *

消えいく意識の中で、強く思った。〝最強〟のその名、お前にはいささか重過ぎるよ。
気丈に振舞っても、強がってみても、悲しみに揺れたその目は隠せないから。

ああ

そうだ、俺が全部背負ってやるよ。

お前の変わりに、悲しみも、最強の重さも全部。
俺が背負えば、丁度いい。
俺が背負えば、丁度いいんだ…。

スパイの恋人

『次のニュースです。先日自宅で発見さた実業家、ロバート・ルーサー氏の遺体から検出された銃弾が、大企業ハンプティ・ドロの社長を殺害しようと本社に押し入った容疑者の銃弾と一致いたしました。幸い、社長は軽い掠り傷程度で済みましたが、犯人は依然として逃亡中。三人組の犯行との事です。また、同時にＦＢＩへと届けられたテープには、ロバート・ルーサー氏によるハンプティ・ドロとの麻薬取り引きについての証言が録音されていたとの事です。現在、このテープの情報を元に捜査を行っておりますが、今のところ証拠となる情報や遺留品等は見つかっておらず……』

「消せよ」
膨れた様に呟く俺。忙しなくチャンネルを切り替えるが、どの番組もこの話題で一杯だ。
女がテレビを消した。
あれから俺は、病院のベッドの上で目を覚ました。寝起きに消毒のつんとした匂いが、鼻を刺したのを覚えている。死んだのかと思った。起きて直ぐは貧血のせいで身体が軽く、加えて服も布団も天井も視界に入るモノ全てが白かったから仕方が無い。
意識が戻り、少ししてから気が付いた身体の不調。暫くの間高熱が続き、身体が岩の様にずしりと重かった。それで、やっぱりまだ生きてるんだと確認した。
しぶといな、俺。
銃弾は左脇腹を貫通したものの、当たった場所はかなりの外側だった様で、出血量程傷は酷くなかったらしい。
「ヤブ医者に当たったな。傷が痛い。寝る」
本当に痛むのは傷なのか、それとも他の場所なのか。よくわからないが、とにかく何かが痛かった。
隣では女が心配そうに、相変らずちょこんと座っている。
俺はテレビのリモコンを女に向かって投げると、そのまま無理矢理目を閉じた。
便所かタバコか何か知らないが、永塚が部屋を出たのが解る。見計らって、二度目の温かくて柔らかいものを、今度は俺の頬に感じた。
「ありがとう」

なあ。
やっぱり似合わないよ。
女に拳銃なんて、似合わない。

武器が欲しいなら〝涙〟を武器にすればいい。
言葉だけではなく、初めてわかった。女の武器が涙だって言う理由。
誰にでも通用する武器じゃないけれど、あの日見たあの涙は、俺にとっては最強の武器だった。

俺に、お前は殺せない。その武器がある限り。

* ** **

病院を抜け出し、絶対安静を無視して、リハビリがてら似合いもしないショッピングに出かけた。
婦人服屋のショーウィンドーを前に、ぴたりと足が止まる。
マネキンが着ているキャミソールドレスに目が行った。色はワインレッド。
うん、イメージ通りだ。
多分。
自動ドアを抜けると、いらっしゃいませと化粧の濃い店員が駆け寄ってきた。
得意では無い雰囲気の店と店員だ。おまけに、ディスプレイされているドレスのイメージとは大きく違っていた。
店内はピンクと赤で統一されていて、恥ずかしくなるぐらいメルヘンなのだ。とりあえず、さっさと用事を済ませて去ろうと思う。
俺は店員に示すよう、ディスプレイされたドレスを指差した。
「あれを」
店員は慣れた様子で店の隅のハンガーラックから、同じドレスを二着手に取り見せてきた。
「ワインレッドとネイビーブルーがございます」
「赤い方で」
「プレゼントですか？」
「はい」
「では、お包みしますね」
俺はもう一つの目的も伝えた。
「あと、コロンを。アンタのオススメでいいから」
「丁度、新作が入っていますよ」
「じゃあ、それで」
普段は煩わしと感じるのだが、こんな時の店員は有難いものだなと思った。
似合わないリボン付きのピンク箱を抱えて次の店へ向かった。目的は、あと一つあるのだ。
幸い数メートル先に見つけた花屋。
本日最後の買い物。
「いらっしゃいませ」

と、花屋の店員。赤毛の三つ編みが似合う、エプロン姿の素朴な女。化粧っ気も少なく、さっきの店員とは大違いだ。
「薔薇の花束を」

俺が帰宅して早々、永塚が奇声をあげた。
「え！ いなばっち、なにしてんの？」
「見てわからんかな。買い物からの帰りだ」
扉を足で閉めた。
本来なら、俺はまだ入院してなければならんらしい。
ただ寝てるのに俺自身が飽きたのもあるが、如何せん病院自体が闇営業のため、色々と放任であり、こうして自由に歩き回れる。
永塚と女は闇医者に大金積んで用意させたらしい、訳アリを匿ってくれるホテルに滞在中である。
「永塚、フォックスは？」
「奥にいるけど。いなばっちが病院抜け出して行方不明だって言ったら、珈琲煎れはじめたんだけど。どういうこと？」
先程からの香ばしい豆の香りはそれか。
「よくわかってるじゃないか」
俺は、似合いもせずに笑った。
ピンクの箱と薔薇の花束を抱えたまま奥の部屋を覗いてみると、フォックスはジーンズにルーズのＴシャツ、長い髪をトップで束ねた姿で、丁寧に珈琲を煎れていた。
「お帰り、ケンゴ。丁度、珈琲が入ったとこよ」
振り返ったフォックスの顔が、一瞬華やいで見えた。
「ただいま」
少しだけ顔を赤らめて、フォックスは見たこともない笑顔で俺の抱えたそれを指差した。
「なあに、それ」
今更だが、こういう時の格好の付け方がわかない事に気付いた。
「言わなかったか？」
柄にもなく、妙に照れてきた。
「綺麗にしてから、死ねって」
フォックスが笑った。嫌な笑いではなかった。
「私の勝ちね」
「ん？」
フォックスは、俺からのプレゼントを受け取った。
「貴方のサイレンサー、やっと外せたみたいだから」
フォックスの目に、涙が浮かんでいるように見えた。そして、彼女は続けた。
「ケンゴにならいつでも、私の最強をあげるわよ」
俺は両手が塞がったままのフォックスの頬を指で軽く掴んで告げた。
「その為の準備だ」
「うん、わかった」

フォックスは、俺のプレゼントを抱えて一旦部屋に入っていった。

　三十分程してフォックスが、戻ってきた。が、頬を染めながらも困った表情を浮かべていた。その姿に、俺は思わず爆笑した。
「ははははは!! な、なんだその格好！ 馬子にも衣装にすりゃなってねえ!!」
膝丈の筈のスカートがロングに、肩に掛かる紐も胸元も大きくて、今にもずり下がりそう。
「なんでちゃんとサイズの確認しなかったのよ！」
「あ、考えてなかった。ははは……」
やべ、腹痛てえし。
「もう、あんたなんか傷口開いてまた入院したらいいわ！」
怒った様に膨れる。その姿も愛しく感じた。

愛しく？

俺がこの女に惚れたって。

まさか。

けど、確かにいつしか名前で呼んでいた。呼ぼうと決めていた。
いつもと違う化粧を施された今の表情は、銃を持たない女にしか見えない。
「こんなんじゃ、殺せねえなあ」
薔薇の花束から一輪抜き出すと、花の根元でそれを千切った。真っ赤に咲く薔薇の花を、彼女の髪へとそっと挿す。
「それじゃあ、お詫びにどこかに連れてってよ」
「そうだな。天国なんて、どうだ」

Egg -スパイの恋人-

著　　鞍馬 榊音(くらま しおん)

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社